

利用動態からみた名勝指定峡谷の現代的意義に関する考察

田中 聡*・佐々木邦博**・上原三知**

*国土交通省北陸地方整備局

**信州大学農学部森林科学科

要約 名勝における利用者の評価や動態を明らかにするため、甲信地方の峡谷の名勝地である、天龍峡、寝覚の床、御岳昇仙峡において、利用動態と評価を、フィールドマップ調査とアンケート調査により把握した。共通して利用者が名勝に求める目的は「眺望」と「自然散策」であった。一方で実際に魅力に感じる要素は、天龍峡では散策路の多様性や眺望景観。寝覚の床では自然散策や探索の面白さ、体験、御岳昇仙峡では視対象が大きく限定的な滝、岩山といった迫力のある景観であった。良好な景観を楽しむだけでなく、自然散策というレクリエーションを同時に楽しむことが名勝の現代的意義の一つであることが示唆された。

キーワード：利用動態，フィールドマップ，視点場，天龍峡，寝覚の床，御岳昇仙峡

1. はじめに

史跡名勝天然記念物保存法は大正8年(1919)に日本の貴重な史蹟、庭園・橋梁、名所、動植物や地質を保存する目的で制定され、翌年に保存要目が制定された。その中で名勝は、「一、著名ナル公園及庭園」を始めとして11項目が指定対象として示された。また要目中の「著名ナル」からもわかるように、世に名高い「名所」が主な指定対象となっていた。その後、この法律は昭和25年(1950)に「国宝保存法」及び「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」と合わせて文化財保護法へと受け継がれた。しかし日本各地に指定された名勝は、社会基盤整備等の人的影響によりその姿を変えてきた。

名勝とはその良好な景観や歴史だけでなく、歴史的・文化的な価値を内包する日本国の財産である。しかしながら、時代の変化と共に景観や景観構成要素が変化してきている。今後名勝としてふさわしい姿を残し、同時により多くの人を楽しめるように、多面的な検討が必要であるが、一方で実際に名勝を訪れる人々の意識やその利用動態に関する知見は不足しているのが現状である。

そこで本研究は、史跡名勝天然記念物保存法により名勝に指定された峡谷を選び、名勝の地形・構成の特徴を把握し、利用者の意識と実際の利用動態を明らかにし、現在の名勝における利用者の評価を考

受付日 2009年7月7日

採択日 2010年2月1日

察することを目的とする。

自然景観の名勝についての研究は深町(2004)が天橋立の歴史的景観の変遷と住民の景観評価に関し、伝統的視点の評価や歴史的景観の活用、新たな視点場の発掘と景観の楽しみ方の提案などから地域住民が景観管理に繋がる仕組みの構築を示した¹⁾。石尾、包清ら(2006)が坊津の歴史的・文化的価値と保全に関して、個別の景への視点場の確保と背景を含めた景観計画の重要性を示唆したが²⁾、自然名勝における利用者の動態や評価に関する知見はみられない。

2. 調査地概要

本研究での調査地は甲信地方の3ヶ所を対象とし、特徴を表1に示した。

(1) 天龍峡(長野県飯田市)

昭和9年(1936)名勝指定を受け、指定面積は36haである。かつては「暴れ天龍」の名前の通り、

表1 調査地の特徴

	指定年	面積 (ha)	地質	指定時の評価
天龍峡	昭和9年 (1936)	39.0	花崗岩 (柱状節理)	狭い峡谷・アカマツ・奇岩・舟下り・断崖・十勝
寝覚の床	大正12年 (1923)	1.7	花崗岩	垂直・階段状・奇岩・侵食
御岳昇仙峡	大正12年 (1923)	30.0	花崗岩 輝石安山岩 (柱状節理)	断崖絶壁・紅葉・奇岩・侵食・滝・アカマツ・岩山・柱状の崖



写真-1 天龍峡全景

激しい川の流れが特徴的な天龍川の中でも、特に狭窄した地形である(写真-1)。峡一帯の特徴として、花崗岩の直方上節理が発達し、直方体を積み重ねたような岩が並び、直立した岩壁が両岸にそそり立つ峡谷が連なっている³⁾。

峡内には明治15年(1882)に選ばれた「十勝」という峡内で特に美しい10ヶ所の場所があり、翌年に書家日下部鳴鶴が名付け、名前を各々の壁面に篆刻した³⁾⁴⁾⁵⁾。

名勝指定時の評価は、狭い峡谷・アカマツ・奇岩・舟下り・断崖・十勝であり、3ヶ所中唯一舟下りが挙げられている。

(2) 寝覚の床(長野県上松町)

大正12年(1923)名勝指定を受け、指定面積1.7



写真-2 寝覚の床

ha。木曾川上流に位置し、澄んだ流れと河岸の浸食の痕が特徴的である。峡谷を形成する花崗岩は、長年の侵食により、大規模な甌穴(ポットホール)を有し、垂直・階段状に河岸が成立している(写真-2)。

浦島太郎伝説があり、浦島太郎が最期を迎えた場所と言われ、隣接する臨川寺には、用いた竿などが展示されている⁶⁾⁷⁾。また江戸時代に成立した木曾八景中の「寝覚の夜雨」とされた場所である⁸⁾。

名勝指定時は、垂直、階段状の岸・奇岩・侵食が大きく評価されている⁹⁾¹⁰⁾。

(3) 御岳昇仙峡(山梨県甲府市)

大正12年(1923)名勝指定を受け、昭和28年(1953)に特別名勝となる。指定面積は30haである。荒川の上流部に位置し、江戸時代に長田円右衛門が御岳新道を開設したことで開けたと言われ、全長約5 kmにわたる長大で深く狭い峡谷と、柱状節理の花崗岩および輝石安山岩の奇岩が特徴的である(写真-3)¹¹⁾¹²⁾。また巨大な岩山である覚円峰や滝が名所である。周辺には荒川ダムやロープウェイなどもあり、観光地の賑わいを見せている。

名勝指定時は、断崖絶壁・滝・奇岩・侵食・紅葉・アカマツ・岩山・柱状の崖による、断崖絶壁と荒々しい川の流れ、そして植物が一体となった景観が評価されている¹³⁾。



写真-3 御岳昇仙峡

3. 研究方法

I. フィールドマップ調査

利用動態を把握するためにフィールドマップを作成し調査に用いた。

回答項目は、以下の通りである。

- 1) 散策したルート
- 2) 写真を撮影したポイント
- 3) 最も眺めの良いと思うポイント
- 4) 好ましい場所
- 5) 好ましくない、改善すべき場所

これらを図-1の回答図に書き込んでもらい、把

握した。なお、散策したルートに応じて、散策距離を都市計画図等を用いて明らかにした。天龍峡及び寝覚の床は1/2500、御岳昇仙峡はゼンリン地図（縮尺1/14200）を用いた。距離の測定には「ウシカタX-Plan」のプランメーターを用いた。

II. アンケート調査

名勝を訪れる観光客の意識や、各名勝の特徴の違いが、実際に利用動態に及ぼす影響を明らかにするために、観光客を対象にアンケート調査を行った。回答者の属性は表-2に示す。

IおよびIIの調査は同時に行った。天龍峡は2008年5月5日および6月15日（5月5日が午後より雨であったため）、寝覚の床は5月17日、御岳昇仙峡

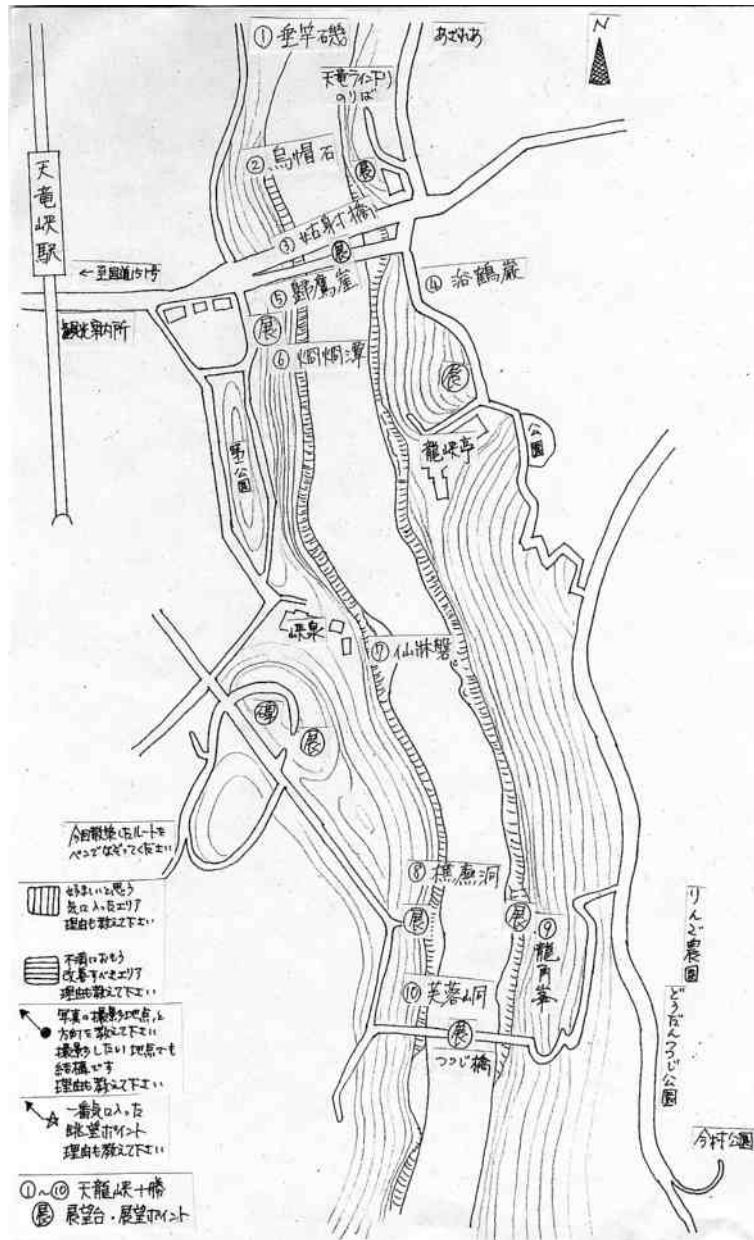


図-1 フィールドマップ回答図（天龍峡）

表一 2 回答者の属性

	天龍峡 5/5	天龍峡 6/15	寝覚の床	御岳昇仙峡	合 計
回収数	31	34	69	79	213
男・女	15 16	19 15	43 26	50 29	127 86
10代(%)	16.1	5.9	1.4	5.1	5.6
20代	12.9	14.7	15.9	17.7	16.0
30代	6.5	11.8	20.3	24.1	18.3
40代	16.1	20.6	5.8	15.2	13.1
50代	25.8	29.4	15.9	19.0	20.7
60代	12.9	17.6	37.7	13.9	22.1
70代	9.7	0	2.9	5.1	4.2
80代以上	0	14.7	0	0	0

は6月1日に行った。いずれも土日祝日で、午前9時から午後5時まで、名勝の利用後に調査、回収した。本研究では花、紅葉など、利用者の動態に影響を与える季節的な景観構成要素を排除し、通常時の利用動態を知るために5月および6月に調査を行った。

4. 結果と考察

フィールドマップ調査の結果から、峡内における利用者の動態を区間別に分類し、その区間における散策率を求めた。また、利用者の動態を回答別に各区間の散策率を求め、利用者の満足度を、「散策前の期待」「散策後の評価」の2項目に関して分類した。動態と満足度に関して、満足度間にt検定を行った。

(i) 天龍峡

天龍峡の散策路をA～Mに区分した(図一2)。散策路の形状は、区間Aを出発し、Gのつり橋を経由しJを通してAに戻る全行程は約1200mであり、特に区間C、D、Fは非常に急勾配となっている(図一3)。区間A、E、J、Lは車道を、その他の区間は自然の中の散策路を歩く。また区間Mは天龍峡舟下りを示し、特徴的である。利用者の散策型に関して、峡内を一周する利用者(一周型)は48.3%、区間Aの橋のみを散策する利用者(橋のみ型)は23.3%であった(表一3)。利用者の散策距離に関しては、利用者の半数は散策路一周分にあたる、1100mから1200mであった(図一4)。一方で約25%の利用者は区間Aの橋周辺にあたる、100m未満であった。散策路を十分に歩くか、ほとんど歩かずに終えるかの2型に大別された。峡内の散策率に関して、区間Aは91.7%と最も高く、次いでG、Hが60.0%であった(表一3)。なお、3ヶ所のアクセスポイントはそれぞれ区間AとG、Hに隣接し

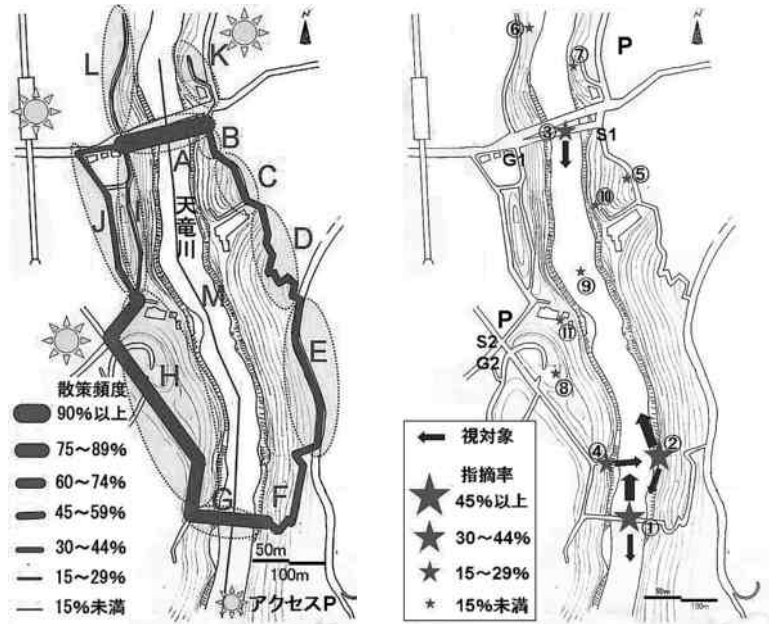
ている。

利用者の満足度と利用動態に関しては(n=60)、区間Cで「とても良かった」と回答した利用者の散策率が有意に高い(p<0.05)。また「とても良かった」は区間B～Hの散策率が非常に高く、「良かった」を大きく上回っている(表一3)。「とても良かった」が「良かった」の散策率を上回った区間B～Hの中で、C、D、Fは非常に急勾配であり、また区間Gにはつり橋がある。平均散策距離は、「とても良かった」が大きく上回った。

利用者の満足度と散策前の期待に関しては(n=65)、「とても良かった(n=19)」「良かった(n=40)」両者に、有意差は認められず、期待している項目に大きな差はみられなかった(図一5)。どちらも「自然散策」「眺望」の選択率が高い。逆に「岩石・動植物」の項目では選択率に差がみられ、「とても良かった」が31.6%、「良かった」が17.5%であった。それに対して散策後の評価では、「狭い峡谷」「奇岩」は両者とも選択率が高く、差はみられない。一方で「岩石・動植物」「歴史・伝説」「展望台」の項目で「とても良かった」が有意に高く(p<0.05)、「つり橋」では「とても良かった」の選択率が非常に高かった(図一6)。また、「散策路」の項目でも「とても良かった」が上回っており、散策に関係する項目で「とても良かった」が上回っていることがわかる。これらの項目は、峡内を十分に散策することで得られる魅力であることが考えられる。

視点場の指摘と視対象に関しては(図一7、表一4)、指摘率の高い①～④のうち、①②④は区間F、G、Hに集中している。特に区間Gのつり橋上の視点場の指摘率が42.6%と最も高い。一方視点場③の指摘率も同様に高く、橋のみ型の利用者は③からの眺めを楽しんでいる。また、①～④の内①②③は視対象が流れの方向の眺望である。また全視点場の視対象の中で、④のみで視対象が特定の奇岩に向けられているが、その他峡内に存在する十勝などに視対象が向けられている視点場の指摘はなかった。

アクセスポイントと散策路との関係に関して、区間Aは二ヶ所のアクセスポイントと近く、良好な視点場がある。また区間CからDにかけて自然の散策路から突然車道になるため(写真一4)、散策路がそこで終わると勘違いする利用者もみられた。そのため、区間F、G、Hに集中する良好な視点場からの眺めや散策を十分に楽しんでいない利用者もいる。また、散策路全体として、道沿いの植生のため

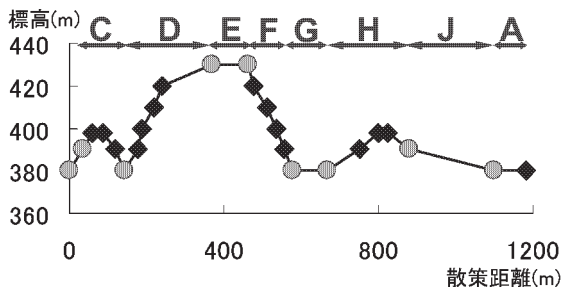


表一 散策ルートと満足度

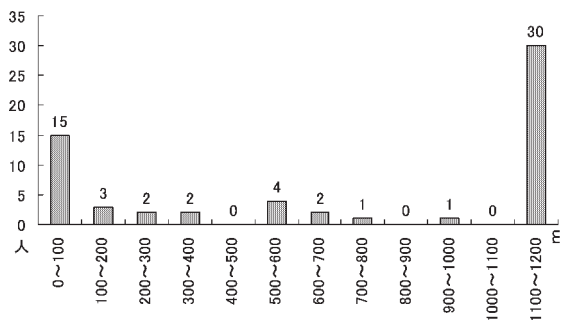
	総合 n=60	とても 良かった n=17	良かった n=38
平均散策距離	709.4m	904.8m	643.7m
一周型	48.3	64.7	42.1
橋のみ型	23.3	5.9	28.9
A	91.7	94.1	89.5
B	56.7	76.5	50.0
C	55.0	76.5*	47.4*
D	50.0	70.6	42.1
E	50.0	70.6	42.1
F	53.3	70.6	47.4
G	60.0	76.5	55.3
H	60.0	76.5	55.3
I	26.7	29.4	26.3
J	36.7	47.1	34.2
K	6.7	5.9	7.9
L	10.0	11.8	7.9
M	3.3	0.0	5.3
平均回答数 (回)	5.6	7.1	5.1

図一 天龍峡：視点場及び視対象

*有意確率5%
 選択率に差があるものを25%の灰色で示す
 単位のない数値は%で示す



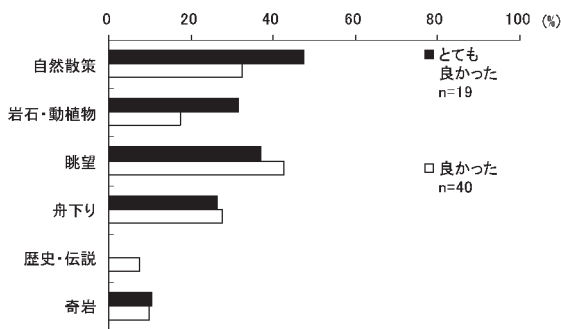
図一 天龍峡：散策距離と標高



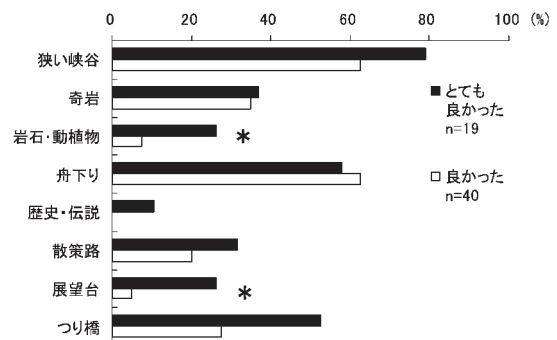
図一 天龍峡：散策距離の分布

表一 天龍峡：視点場、指摘率及び視対象 (n=60)

視点場	選択率(%)	単方向	複数方向	視対象
①つつし橋	42.6		●	流軸
②龍角峯	31.1		●	流軸・鳥瞰
③姑射橋	24.6	◎		流軸
④龍角峯対岸	21.3	◎		龍角峯
⑤龍峡園	4.9	◎		
⑥烏帽石	4.9	◎		
⑦船乗り場	1.6	◎		
⑧天龍峡碑	1.6	◎		
⑨舟下り	1.6		●	
⑩龍峡亭下	1.6	◎		
⑪峡泉	1.6	◎		



図一 天龍峡：散策前の期待



図一 天龍峡：散策後の評価



写真-4 区間CからD (天龍峡)

に散策中に川の様子や眺望を眺められないという意見も多くあげられた。

区間Aの視点場は指摘率が高く、良好な視点場といえる一方で、「展望台」「つり橋」は、区間F, G, Hに位置しており、辿り着くには、勾配のきついC, D, Fを通過する必要がある。以上のことから、峡内を十分に散策することが利用者の満足に繋がっていると考えられる。勾配が急で、アップダウンがある区間を、苦労しながら散策し、つり橋からの眺めや、一周し終えた達成感が、利用者の評価に影響を与えた可能性が考えられる。一方で、アクセスポイントや散策路の形態から、良好な眺望や散策を十分に楽しめていないことも示唆された。

(ii) 寝覚の床

寝覚の床の散策路をA～Lに区分した(図-8)。散策路はAからEまでの全行程500mで、全体的に緩やかな勾配だが、区間Eは階段状の奇岩群となっており、岩を上り下りする(図-9)。また区間Eでは川のそばに下りることができる。区間F-Iは美術公園を、J-Lは林内を散策するルートとなっている。散策率に関しては、区間A-Cのみを散策する利用者(橋まで型)は20.0%、A-Dのみを散策する利用者(散策路型)は15.4%、区間Eの奇岩群まで散策する利用者(奇岩群型)は18.5%であった(表-5)。利用者の散策距離に関して、利用者の60%以上は区間A-Eの散策にあたる300m～500mに分類された(図-10)。その他A-E以外の区間も散策する利用者があるが、散策の中心はA-Eにあることがわかる。峡内の散策率に関して、区間Bが96.9%と最も高く、区間A-Cの散策率は80%を超えており非常に高い(表-5)。一方で美術公園や林内を散策する区間F-Lの散策率は総じて低い。なお、峡内のアクセスポイントは、区間AとKに隣接しているが、多くがAのアクセスポイントを利用

している(図-8)。

利用者の満足度と利用動態に関しては(n=65)、区間H, Iにおいて「とても良かった」の散策率が有意に高い($p<0.05$)。また、区間F-Lに関して、全ての項目で「とても良かった」の散策率が上回り、特にG, H, I, Kでは大きく上回った(表-5)。この区間では「美術公園のオブジェクトは要らない」「パツとしない」という意見が挙げられる一方、「沢の水音や自然が楽しめる」という意見も挙げられ賛否両論となっている。平均散策距離は「とても良かった」が上回った。

利用者の満足度と散策前の期待に関しては(n=69)、「奇岩」で「とても良かった」が有意に高い($p<0.05$)。両者共に、「自然散策」「眺望」の選択率が高く差はみられないが、特に「とても良かった」では「奇岩」の選択率が高かった(図-11)。それに対し散策後の評価では、「川の流れ」で「とても良かった」が有意に高く($p<0.05$)、また、「岩石・動植物」「展望台」の項目で「とても良かった」の選択率が高い(表-12)。特に「岩石・動植物」は奇岩群の侵食の様子などが評価され、「川や奇岩に近づけることがとても良い」と評価された。「川の流れ」「展望台」「岩石・動植物」は、充分散策することで得られる魅力であると考えられる一方で、「散策路」そのものの評価は低く、歩きにくさが特に指摘された。

視点場の指摘と視対象に関しては、指摘率の高い①～⑥の全てが区間A-E上に位置しており、②を除いた全ての視点場における視対象が区間Eの奇岩群の様子に向けられている(図-13, 表-6)。一方で、寝覚の床は視界が開けているために、広い範囲でEの奇岩群を眺めることのできる特性がある(図-13)。

アクセスポイントと散策路との関係に関して、区



写真-5 寝覚の床 奇岩群

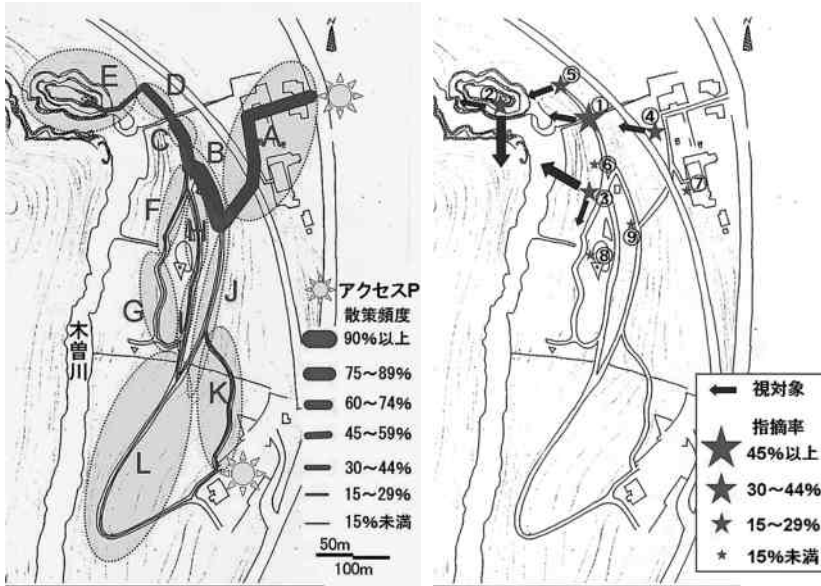


図-8 寝覚の床：散策路区分と散策率 図-13 寝覚の床：視点場及び視対象

表-5 寝覚の床：散策ルートと満足度

	総合 n=65	とても 良かった n=24	良かった n=33
平均散策距離	511.6m	600.8m	480.6m
橋まで型	20.0	12.5	21.2
散策路型	15.4	12.5	15.2
奇岩群型	18.5	20.8	18.2
A	87.7	83.3	87.9
B	96.9	95.8	100.0
C	86.2	79.2	90.9
D	61.5	62.5	63.6
E	40.0	45.8	42.4
F	23.1	25.0	24.2
G	9.2	16.7	6.1
H	16.9	33.3*	9.1*
I	15.4	29.2*	9.1*
J	13.8	20.8	12.1
K	15.4	25.0	12.1
L	1.5	4.2	0.0
平均選択数	4.7	5.2	4.6

*有意確率5%
 選択率に差があるものを25%の灰色で示す
 単位の無い数値は%で示す

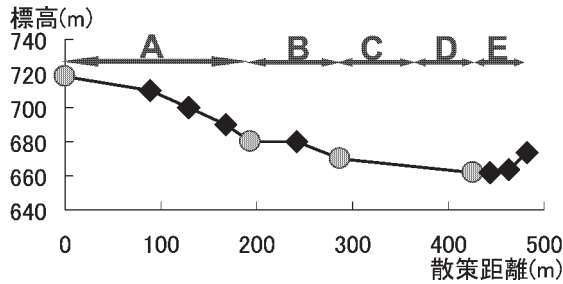


図-9 寝覚の床：散策距離と標高

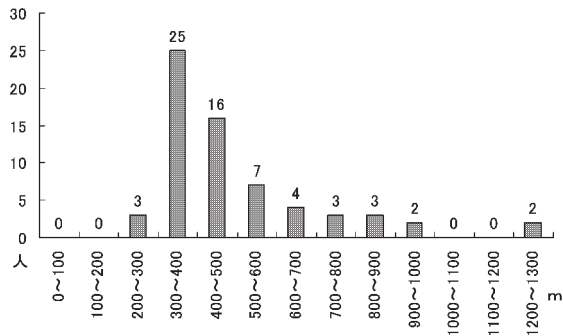


図-10 寝覚の床：散策距離の分布

表-6 寝覚の床：視点場、指摘率及び視対象 (n=65)

視点場	選択率(%)	単方向	複数方向	視対象
①橋	36.9	◎		奇岩群
②奇岩群	21.5		●	流軸
③八景	20.0		●	奇岩群
④臨川寺	18.5	◎		鳥瞰
⑤歩道終点	16.9	◎		奇岩群
⑥名勝碑	13.8	◎		奇岩群
⑦美術館	3.1	◎		
⑧モニュ	1.5	◎		
⑨休憩所	1.5	◎		

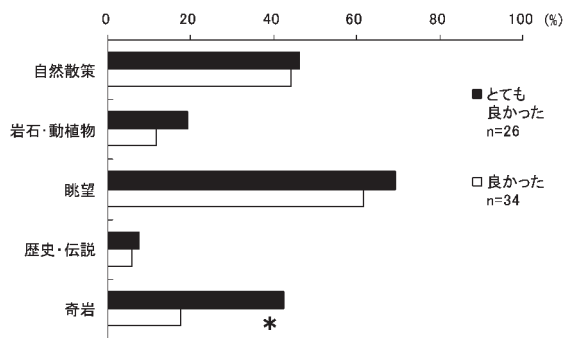


図-11 寝覚の床：散策前の期待

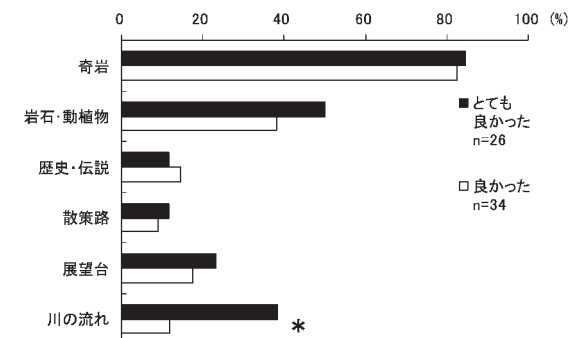


図-12 寝覚の床：散策後の評価

間Aにあるアクセスポイントから視点場③, ④へは、非常に短い散策距離で辿り着くことができる。またこの視点場からの良好な眺望に満足し、峡内を散策せず終える利用者も多い(写真-5)。

寝覚の床の散策路自体距離が短いものであることから、利用者は長く散策することを主目的とせず、色々な場所から眺望を楽しみ、自然を楽しみ触れて体験する変化に富んだ散策を求めていることが考えられる。寝覚の床では、眺望や川の様子、侵食などを眺め近づき触れることが満足度に影響を与えている。一方で、視点場や散策路の特徴から、ほとんど峡内を散策することなく良好な眺望を得られるため、様々な角度からの眺望や、林内の散策、水に親しむような体験を得られていない利用者も見られた。

(iii) 御岳昇仙峡

御岳昇仙峡の散策路をA~Gに区分した(図-14)。散策路は区間G、昇仙峡下入り口から上流方向、区間Aの昇仙峡上入り口に向かう全行程約3300mで、全体とした非常に緩やかで、距離3300mの中で約60m程度登る(図-15)。また、区間A-Dは自然の中を歩く散策路、E-Gは車道を歩く散策路となっている(写真-6)。散策路は下流から上流へ向かう一本道のため、往復することになる。

散策率に関しては、区間Bの昇仙橋まで散策する利用者(橋まで型)は10.5%、区間Dの夢の松島まで散策する利用者(夢の松島型)は13.2%、散策路を往復する利用者(往復型)は52.6%であった(表-7)。利用者の散策距離に関して、利用者の50%は峡内を往復しているのに対し、15%は区間A-Bのみの散策で終えている(図-16)。天龍峡と同様に、散策路を十分に歩くか、ほとんど歩かずに終えるかの2型に大別されたが、天龍峡のほうが顕著にみられ、御岳昇仙峡は往復する利用者の割合が高い。峡内の散策率に関して、区間Aの散策率が93.4%と最も高く、区間A-Dの散策率は70%を超えている。峡内のアクセスポイントは区間A付近の昇仙峡上入り口、F付近の県営駐車場入り口およびGの下入り口の3ヶ所となっている(図-14)。なお、Gの下入り口から峡内を散策する利用者の83.3%以上は往復型であり、残りの利用者は「虫が多くて、歩くのをやめた」等の理由により散策を途中で終えている。

利用者の満足度と利用動態に関しては(n=76)、区間Bで「とても良かった」が有意に高く(p<0.05)、同様に区間A、C、Dの散策率も上回り、A-Dの散策率が高い(表-7)。この区間には、滝や岩山、石門など見所が集中する。平均散策距離に



写真-6 区間Gの様子(御岳昇仙峡)

差はみられなかった。

利用者の満足度と利用動態に関しては(n=79)、「自然散策」「岩石・動植物」は両者とも選択率が高く差はない。「眺望」では両者とも選択率が高いが、「とても良かった」の選択率が有意に高く(p<0.05)、眺望に関する項目の選択率が非常に高い(図-17)。それに対して散策後の評価では、「滝」「奇岩」のような特徴的な項目の選択率が高いが、両者に差は見られなかった。一方「とても良かった」は「侵食」「岩山」「急流・淵」で有意に高く(p<0.05)、「散策路」の選択率が高い(図-18)。

視点場の指摘と視対象に関しては、指摘率の高い①~⑤の視点場のうち、①~④は区間A-Dに集中している(図-19、表-8)。また、視対象となっているのは、「滝」「岩山」「流れの様子」「侵食の様子」等であり、「とても良かった」と回答した利用者が散策後の魅力として特に高く評価した「侵食」「岩山」「急流・淵」と繋がっていることが考えられる(表-7、図-18)。

アクセスポイントと散策路との関係に関して、区間Aの上入り口およびEの駐車場入り口からは、A-Dの見所にすぐに辿り着くことができる一方で、Gの下入り口からは、A-Dまでの散策距離が非常に長い。区間F-Gには、多くの奇岩・巨岩や岩山がある一方で、利用者からは、「散策距離が長すぎて疲れる」「奇岩などもあるが、アップダウンが少なく単調で飽きてしまう」「自然の散策路でないのが不満」等の意見も寄せられた。

以上から、御岳昇仙峡では十分に峡内を散策することが必ずしも評価を高めるわけではなく、A-Dの見所の多い場所を十分に散策することが評価に繋がると考えられる。逆に変化が少なく長い散策路、散策が飽きられた可能性が高いと考えられる。また散策距離が長いことや逆にほとんど散策せずに見所を眺められることで、他の場所にある見所が評価さ

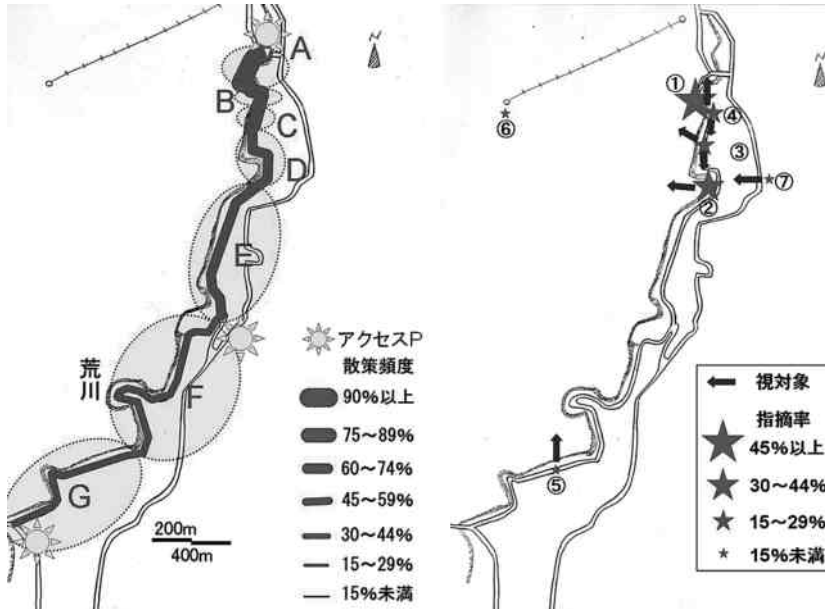


図-14 昇仙峡：散策路区分と散策率

図-19 昇仙峡：視点場及び視対象

表-7 昇仙峡：散策ルートと満

	総合 n=76	とても 良かった n=45	良かった n=27
平均散策距離	2001.8m	2154.6m	1981.6m
橋まで型	10.5	8.9	7.4
夢の松島型	13.2	13.3	11.1
往復型	52.6	57.8	51.9
A	93.4	97.8	88.9
B	88.2	95.6*	77.8
C	77.6	86.7	70.4
D	73.7	80.0	70.4
E	60.5	66.7	59.3
F	52.6	57.8	51.9
G	57.9	57.8	63.0
平均選択数 (回)	5.0	5.4	4.8

*有意確率5%
 選択率に差があるものを25%の灰色で示す
 単位のない数値は%で示す

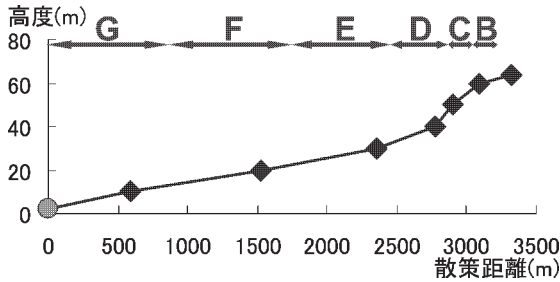


図-15 昇仙峡：散策距離と高度

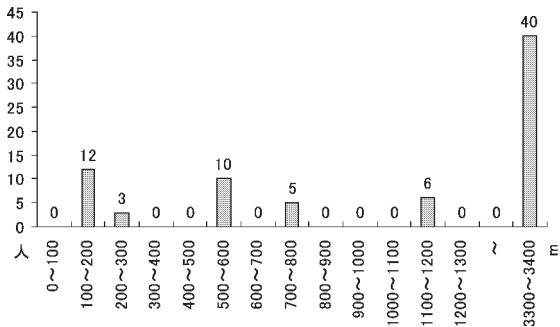


図-16 昇仙峡：散策距離の分布

表-8 昇仙峡：視点場、指摘率及び視対象

視点場	選択率(%)	単方向	複数方向	視対象
①滝	53.9	◎		滝
②昇仙峡園地	35.5	◎		覚門峰
③石門	21.1		●	周囲
④昇仙橋	15.8	◎		流軸
⑤奇岩群	10.5	◎		奇岩群
⑥ロープウェイ	5.3		●	
⑦県道	2.6	◎		

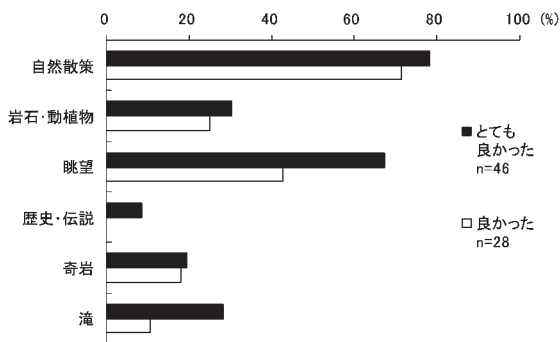


図-17 昇仙峡：散策前の期待

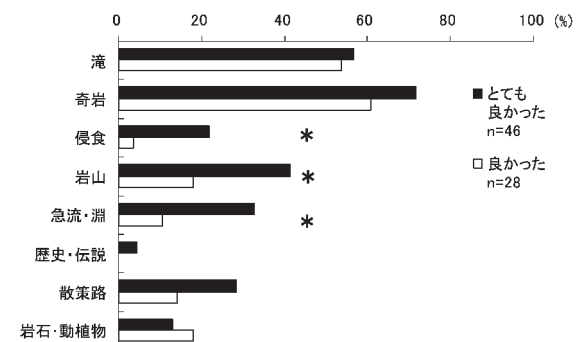


図-18 昇仙峡：散策後の評価

れず、楽しまれていないことが考えられる。

5. 総合考察

利用者が名勝に求める魅力は大きく「眺望」「自然散策」である。一方で、天龍峡では散策路の多様性や眺望景観が、寝覚の床では自然散策や探索の面白さ、体験することが、御岳昇仙峡では視対象が大きく限定的な滝、岩山といった迫力のある景観がそれぞれ利用者の大きな満足に繋がったと考えられる。地形、景観的特徴、散策路形態や属性に応じて、利用の仕方が多様であることがわかった。自然散策という現代的なレクリエーションと、名勝指定当時に評価された良好な景観を同時に楽しむことが、名勝の現代的意義の一つであると考えられる。一方で、利用者の評価は眺望、散策に特化しており、社寺、奇岩、伝説などの文化的側面は薄らいでいることがわかった。また、散策路の形態、視点場の設定、アクセス面で、眺望や散策の魅力を充分得られていない可能性も同様に考えられた。

名勝における文化的側面の再認識を行い、表示板や案内板の充実、ガイドによる紹介、来訪前における宣伝の見直しなど、情報提示の見直しが考えられる。また、名勝における散策の重要性が示唆されたことから、歩行者専用の散策路や視点場、実際の視点に関する評価や整備が今後の課題である。

引用文献と補足説明

- 1) 深町加津枝・奥敬一 (2004)：天橋立における歴史的景観の変遷と地域住民の景観評価に関する研究，ランドスケープ研究67(5)，813-818
- 2) 石田尾博夫・包清博之 (2006)：名勝史跡「坊津」にみる「坊津八景」の景観的意義とその保全条件に関する研究，ランドスケープ研究69(5)，731-736
- 3) 木下忠行ら (1997)：名勝天龍峡命名150周年記念誌
- 4) 今村良夫・真直 (1979)：天龍峡—歴史と叙情—，信濃路
- 5) 天龍峡十勝とは垂竿磯・烏帽石・姑射橋・歸鷹崖・浴鶴巖・仙牀磐・炯炯潭・龍角峯・樵廡洞・芙蓉洞の10ヶ所の景勝
- 6) 色部裕二郎 (1909)：科野名所集，180-182p
- 7) 中村安孝 (1972)：木曾路名所図会，271p
- 8) 木曾八景：<http://www.enasan-net.ne.jp/kisohakkei/nav.html> (1997年10月7日 最終更新2008年9月23日参照)
- 9) 上松町 (2000)：上松町誌第二巻民俗編
- 10) 長野県 (1943)：史蹟名勝天然紀念物調査報告第一巻，107-110p
- 11) 山梨県教育委員会社会教育課 (1953)：山梨県文化財
- 12) 甲府市教育委員会 (1978)：甲府市の文化財，109p
- 13) 山梨県 (1926)：史蹟名勝天然紀念物調査報告第二巻

The considerations of contemporary meaning by the visitor's behaviors at the gorge designated as national scenic beauty

Satoshi TANAKA*, Kunihiro SASAKI** and Misato UEHARA**

*Hokuriku Regional Development Bureau, Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

**Department of Forest Science, Faculty of agriculture, Shinshu University

Summary

This study aims to grasp the characteristic of topography and the composition of the canyon, and to clear the visitor's consciousness and their behaviors by the analysis of questionnaire and the field map in "scenic spots": Tenryu-kyo, Nezamenotoko and Mitakesyo-senkyo. The questionnaire is done in May and June 2008. The routes where the visitor took a walk are divided into two types. One type is to take a walk through the canyon and another type is to take a walk a part of routes. The visitors like to take a walk, but they are not much interested in historic value. Only good scenes are likable.

Key word: visitor's use, field map, view point, Tenryu-kyo, Nezamenotoko, Mitakesyo-senkyo